

大陽1巻6号 1895・明治28年6月

小説

現時第一流の譜名家に類し、尤も經營博識の餘に成れる妙作を描く、一齣自ら一齣の妙ありて、加ふるに名家の精美なる挿畫を以てし、七情盛發運道あらざらむ、

涙の媒介 探菊散人

記者曰、君は佐野氏なり、通稱傳平、舊の號を山々亭有人といふ、東京市日本橋區長谷川町に生る、明治元年福地橋居士と俱に江湖新聞を編して禁止となり、同五年二月東京日々新聞を起し久敷く日報社に椅子を占めしが、同十九年やまご新聞を起して以來同社を主宰せり實に幕府の世變りより小説家を以て存在せる者は君一人なり

近年女義太夫といふもの一の流行物となり上手妙音と稱さるゝ屈指の男太夫も爲めに壓せらるゝの勢ひなりき凡そ中流より聲曲の流派數種ありと雖も女の太夫にして男子を壓せし者曾て無かりしかと云へば然るにもあらず實曆の頃鶴賀加賀八太夫と

言る者あり又の名を新内と稱し始め富士松薩摩の門人なりしが新内節といふ一流を起し劇場へも出諸侯の興向き又は藏前邊の豪家杯へも相聘せられ諸流の太夫を壓するの勢ひなりしが安永三年八月六拾壹歳にて物故せり其門人に加賀歳といふ者ありて盲人ながら節音聲どもに師に伯仲の技量あれば二世の新内となりて流行先師に譲らず、此新内に貳人りの娘あり姉は父の舊名を續ぎて加賀歳、妹を鶴吉と稱し姉妹共に技藝は親の仕込みにて優劣はあらずも姉の加賀歳は瘡癩の病み重くして容貌醜くけれど妹の鶴吉は衣通小町も三舍を避るの美形なり殊に先師の

餘波とて今の新内も諸方より相きを受け... して或入りの娘を名代に出せる事もありしが...

色家にて膳房の修らざる為り... 願母なれば今鶴吉の美貌と美音を見聞て...

藤金澤等の宅を廻動したるに須藤金澤は不在... 昨夜は二人を奥に通し昨日は種く造作になりしと...

手前へ仰せ附らるゝ權偏に御成しを願ひ升... 其當時より維新前迄は毎年五月廿八日は...

第一回

其方達の都合を計って運るにも正直通り宜と... 致して相應に義理も出して居り升から何と...

加賀節の梅が妻一段を飾りたるに願母は更なり... 刻の早ければ隅田川に漕登り...

瑠璃の終れる頃舟は兩國川に戻りしが恰も好し花火を揚げる時なりき

因みに云ふ鶴吉が唄ひたる加賀節てふものは高治寛永の頃中村勘三郎座の俳優多門庄左衛門、出来島小颯、花井才三郎、玉村吉彌、玉川仙之丞などいふ美男子が唄ひ始め一時流行して中絶

爲したのを加賀太夫が予が名に由縁あればとて唄ひ出せしと云ふ其頃みなし栗といふ俳句の集に

からうたを加賀に和々蛙かな

與

花火を揚終りたるは戌の下刻則ち今の午後十時少しく前なり頼母等は例の門限を氣遣ひ元柳橋の大櫓橋へ船を着一同上陸爲して米澤町の三浦屋といふ船宿にて休息し同家より一同駕にて大名小路の上屋敷へ戻りたり鶴吉加賀歳にも駕を遣らんと言ひたるを鶴吉等は少し寄り道があればと固く辭し姉妹手を引き合ふて同家を辭せしが其頃本所一目橋の向ふは御旅辨天松井町とて此邊は都て遊女屋町にてあり御旅とい一目橋通りを左りへ少し入り込みたる所に深川八幡の御旅所がありしゆも此邊を御旅と唱へ辨天といは今も同所に鎮めある辨天神社の近邊をいひ松井町は今尙同じ此遊女町は天保十三年岡崎所御取拂ひの節断絶し新吉原町類焼の節に限り遊女屋の假宅を許さるゝ事あり此辨天前に寶來屋といふ引手茶屋ありしが其軒先に小腰を屈め此方に伊勢



新の若旦那が御出ですかど問ふ者は別人ならぬ鶴吉なりハイ先刻から御待かねで被爲在い升サア此方へ御出遊ばせと少女の案内に連れて興まりたる座敷へ至れば年の頃は廿五六なるべく色白やかに鼻筋通り口元は尋常なれど眼は大きく結城紬の單物に紺献上の男帯小紋の縞の羽織を袖疊にして脇に置き何やら小唄の本を讀居りしが夫と見るより本を脇に置き 斯是は鶴吉さんか思ひの外早かつたね 鶴吉前はんが無待遠で御在だらうと思つて氣が氣にヤアありませんでした夫に元柳橋から上陸て米澤町の三浦屋から客は駕で歸る吾儕達にも駕を遣うと云言成つたんですが爰で覆を下りても賑が悪いからと思つて駕を断つて歩行て来ましたら何んだか息が切れて仕方がありません 斯然か夫りヤア氣の毒千萬ナ然して姉さんは 吾儕は爰へ來るといふ樂しみがあるから好様なものゝ氣の毒なのは姉さんで牛に曳れて善光寺参りて爰迄歩行て来て二ツ目の加賀吉といふ弟子の家にて居て呉被成るのです 斯姉さんは中々粹だの然して是非今夜遠度といふ手紙が有つたが何ぞ急用か 四五日跡に山田屋の兼さんからの口で久保町の清水へ往きました所が客は大夫様と下役の仁が四人を執持は兼さんに跡で聞は前はんの阿父さんださうです然すると昨日兼さんが家へ来て一昨日俺共が權門をした客は大名の御家老の御子息で實に飛鳥も落す様な勢ひの御仁で金は自由になるし唐から揚貴妃を呼ぶ事もすれば出来る御身分だが縁でこそわれ和女を萬端御執心で直に藝人を止めにして屋敷へ來て呉るなら親子や姉が生涯困らぬ様に扶助も仕度矢つ張藝人で居たくば外妾にして置ても宜と實に牡丹餅で御幣といふ好咄し殊に此咄しが何等にか纏まれば俺も都合よしモウ壹人は長谷川町の新道に居る伊勢新といふ呉服

屋だが彼人の都合にも成る咄しだからと姉さんと阿父さんを並べて置ての御願み阿父さんの言ひ升には實は何時がいつ迄も藝人で置升より身が固まれば俺も安堵是も傍侘流儀の方は明日私に死ましても加賀歳が居りますすれば其中には三代目を繼者も出來ませうと言れた時には何う仕度かと思ひましたスルと姉さんが吾儕は壹人りの妹でござい升から假令共穉きに致しましても壹軒の家の女房となり升理由なら宜敷けれど妾御室に遷る事は眞平御免を蒙りますと断然断はつたので少し座は去らけました が乃は兼さんも苦勞人丈此事はかりは親の威光で壓制する理由にも行まいから鶴さん駕り考へて御覽被成い、トキニ明後日の川開きには例の御仁を權門で屋形船で押出すのだから米澤町の三浦屋迄來て呉と約束をして御歸りでした跡で姉さんが明日は霞が關の御住居へ具館ので仕方も無いが明後日川開きの歸りに新さんに御目に掛つて駕り相談をして御覽と信切に言つて呉ましたので手紙を上げたのでしたが大に御待せを致しました斯夫りヤア好咄しちやアねへか和女を可愛がつて樂をさせて阿父さんや姉さんを生涯困らねへ様にして遣ると此様な上口を外すと折角來様とする運を取外すから何を差置ても其玉の與へ乗るべしだねといふ新三郎の顔を打守り難て兩眼よりハラハラと涙を翻し 夫じやア前はんは若し吾儕が往うといふなら遣る思召なんですかト眼を据て新三郎を白眼たり 斯儕も男だから太刀打の出来る箱當なら折吉原の夜櫻にと一暮出す氣もあるけれども先方ヤア白柄組で無く正眞のダ、ラ大盡沙吹面の名古屋山三じやア出幕にならねへや 吾儕が此様に氣を様でるのにも前はんは平氣なだね 吾平氣でもねへが假令和女を儂の方へ引取つた所で師匠や姉さんを生涯生活すといふ理由

にも行ず娘は欲しいが何もある事も出来ぬへといふのじやア冒頭に咄しに取り掛る事が出来ぬ。鳥夫りやア阿父さんでも姉さんでも吾儕を食物にして生涯左り團扇で暮さうといふ卑劣な下はありませぬ現に姉さんは兼さんへ断はるのに假令俱様をしても一軒の家の女房ならばと言つた位ですすから前はんが眞底吾儕を賣つて御呉ん被成る氣なら誰か頼んで早く言込んで下さい。兼夫じやア然様けれども僕の方でも第一誰か頼んで親父を説附けて貰はにやアならぬ。が親父も其大夫の方の執持請中じやア困つたものだがト暫時思案の跡なりしが、兼毒が纏じて纏になる様もあるから寧ろ馬具屋の兼さんへ實は斯々だと打明て頼んだら依氣な仁だから思ひの外此方の味方に成つて呉るかも知れず兼さんを味方にして親父を説附て貰つたら多分親父も承知を仕様と思ふ。兼夫は好案事です家の阿父さんも兼さんから咄しを持って往ば否應無しに承知を仕升。兼言出し悪いけれども皮切り炎を揺られる氣で思ひ切つて遣つて見様。兼何卒然して呉被成り拜み升。兼俺一人りて頼むより寧ろ和女と二人りて頼まうじやアね。兼夫も宜ごさい升が何だか間が悪いじやアありませぬか。兼夫見ね。和女だつて間が悪いや夫じやア斯仕様何所ぞ一兼さんと呼ぶ和女は紙門の蔭に居る俺が一人りて序開きをした所一和女が出て一緒に頼むといふ趣向に仕様。兼せめて然して下さい。兼夫じやア何日に仕様。兼善は急げと言升から明日の晩は何うです。兼俺は宜が兼さんの都合は何うだか。兼兎に角明日の晩方並茶屋の小川迄来ませうか。兼然して貰いませう。兼然すりやア兼さんがウソと言升様。兼不動様を御願ひ申て置ます。兼夫も宜う餘り空咄しだつたが何ぞお食か。兼イ、エ何も欲しくはありませぬ。兼夫じやア

少しも速く往ね。兼何も其様に退ひ出ずと宜じやアありませぬか。兼退出しやア仕ね。が姉さんが咄待遠だらうと思つてよ兼姉さんは加賀吉さんの養古でもして遣つて居ませうから少し位の間が取ても宜ごさい升。兼待るゝも待身になるなどか待といふものは長へものだ夫じやア俺が二ツ目まで和女を送つて進様。兼オ、嬉し然して呉被成り

第三回

人形町より霞町へ曲らんとする角に佃屋といふ割烹店あり彼會席料理といふ上等の向きにはあらざるも手輕で美味といふ今日で申せば淺草公園の松島の如く主人が自から買出しにも往き庖丁も探ると云るが呼ぶので粹とか通とか言るゝ者は佃屋の料理を口にせざるを能る程なり其佃屋の表二階に吸物膳を前に扣し猪口は各自に一個宛膳の隅に置き酌取女は少し内談があればと座を外させた客二人は例の山田屋兼吉と鶴吉が二世と誓ひし情夫の新三郎なり。兼何かしらね。が若旦那の御馳走に成ちやア濟ね。兼何う致しまして御用多の所を御呼立申て甚だ失禮で些折入つて親方に御願ひ申し度事がございまして。兼何です是から阿父さんの名代に御屋敷廻りでも仕被成る事に就てかね。兼へい夫も御引き廻しを願はにやアなりませぬが差當つての御願ひは誠に申上げ悪うござい升がト額の汗を拭ひ居りたり。兼何が其様に被仰り悪いのです。ハア分つた何所か花魁に填ん被成つて廊の金には盡るが習ひといふ致切り形で少し都合をして呉ども言被成るかね。兼左様な理由でもございませぬ實はト口の頭迄出掛しかど途香込んで又僕頼の汗を拭ひ紙門の蔭に閑居たる鶴吉は迂しがり紙門を開て其所へ出れば兼吉

は驚き。兼鶴さん何うして爰へ来た。兼唯今御願ひ申掛ましたのも實は此鶴吉の事で。兼ハテ夫じやア鶴さんが此程俺共が頼んで居る事を断つて呉るといふ咄しかね。兼夫も然なり其外に少し御願ひ申度事もございまして。兼其外といふのは何だ。兼實は俺が此鶴吉を女房に持度でござい升、兼吉は其意外に驚きて暫時詞も無かりしが纏て莞爾笑ひ。兼若旦那和郎さんには鶴さんと疾から感るにして居被成といふ理由か、ト言れて鶴吉は満面に時ならぬ紅葉を散らして差響向き新三郎は天窓を極ながら。兼面目次第もございませぬ。兼其奴は困つたナ夫じやア定めし鶴さんから委しい事は聞被成つたらうが彼御屋敷の乗出し御用を和郎の御家と俺の所で入札無しに引受様といふ目算で運動を始めた所が不圖鶴さんの煤酌人を仰せ附られて今日か明日は鶴吉さんの方から色よい返事が有だらうと待つて居た矢先へ兼から棒の煤酌人咄し夫も九で懸構への無へ人ならまだしも同じ煤酌人仲間の子さんちやア何う手を着て宜か實に當惑の至りだに頼まれて見りやア自己の手際にはやア行ねへと突放す理由にも行め一成るかならね。かしらね。が悪い様にやア仕めへから横らね。ト簡を出しなさんな。ト聞て鶴吉は胸を推下し。兼吾儕ア親方に面目無くして御挨拶も申上げませぬで済ませんでは了貴郎が受合つて下さつたので張り詰て居た胸が一度に透た様な氣が致し升何ぶ宜敷く御願ひ申升。兼若旦那貴郎は散假者だ西の國で三拾萬石取る御家老の若大夫が千金を積んでも妾に仕度と言被成るを振向いても見ね。で親方宜敷く御願ひ申升と手を突て頼むといふのは大した腕前です。兼親方治許ちやア不可ませぬ。兼凡そ女藝人が何百人といふ中で一言つて二の無へ鶴吉さん命を掛て添度といふ男が出入り明察

の息子さんとは俺まで鼻が高様な氣がする、鶴さんの阿父さんは敢て不承知も言つて呉り。が新兵衛さんを説のが骨だよ新親の事を彼是申ては濟みませぬが分ら無く成り出すと無法に分らね。ので毎度手古摺升から嚙御腹の御立になる事もございませうが御勤辨下さつて御氣長に御掛合を御願ひ申升。兼夫りやア長く交際して居るから阿父さんの氣性も大概志つて居升から御心配にやア及ばね。兼有難ふ存じ升。兼和郎さんの御馳走に成つちやア濟ね。が些つとは奢被成つても好筋の事だから御遠慮無く御馳走に成やせうト此話しも一團落附きたれば新三郎は手を鳴して下婢を呼び急いでお肴を命じたるにやアハと回答で纏て持出たるは利休形の長盆へ根來塗りの大椀を盃洗と爲し然の夕時代はあらざるも貴瀬戸の酒次に南京染附と雲鶴三鴻の猪口を持来り尙餘々根來塗の膳に茶碗盛を載て持出着は膳のフツツ切を大根下しにあてて之を赤繪の小井に入れ膳の子と竹の子の穂ばかりを甘煮と爲し七貫の手にはあれど無疵の青磁の小鉢に之を入れ同じく利休形の長盆に載せて持出たるを兼吉は一々手に探りて右見左見。兼愛の家は食物が甘へばかりで無く器は悉く威服だ膳も手際宜く薄作の差身に餅と作り分杯は盛心仕ね。が奴豆蔵の様にフツツ切りは作前だ茶碗盛の器も中渡りでこそあれ鳥渡踏の主人は茶人に見ゆる。兼姉さん御家の旦那は茶を被成るかね。下。ハイ御茶が好で毎月二七には宗匠が聲古に御出でござい升。兼何流を被成る。下。何だか吾儕どもは存じませぬが遠州流だとか申す事。兼何うも然で有うと思つた料理屋の主人杯は少し茶の氣があると同じ膳でも甘く食せるから仕方の無へものだ。三人程能く食事を終り兼吉は手洗にどて下へ行き帳場へ至りて勘定を爲さんと云たるを先刻伊